――――――――特集●辞書のゆくえ

『中日大辞典』第三版の編集を終えて

愛知大学『中日大辞典』第三版の完成を間近にひかえ、編纂所の主要編集スタッフが集まり第三版編集の苦労話や理想とする中国語辞典について、さらには紙辞書か電子辞書かといった辞書の将来をその豊富な経験に基づき、時には裏話などを交えて大いに語り合う。

今泉潤太郎〈愛知大学中日大辞典編纂所編集主幹〉
×
顧　明耀〈同編纂所編集委員〉
×
吉川　剛〈同編纂所編集委員〉
司会　安部　悟〈同編纂所所長〉

安部　待望の『中日大辞典』第三版がいよいよ年内完成の運びとなりました。私は、今泉先生の後を継ぐ形で二〇〇三年から中日大辞典編纂所の所長となり、力不足は承知の上でしたが、第三版を何としてでも出版したいという一念でここまで来ました。そして今やっと年内完成の目処がつき、これまで第三版出版のためにご尽力いただいた多くの方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

本日は、編集作業を終え、現在はその校正作業に追われている先生方に、お忙しいなかお集まりいただきました。実は今回、『中日大辞典』第三版の完成を目前にし、『中国21』で辞書特集を組むことになり、その編集を任されたものですから、本日は私が司会を務めさせていただきます。先生方には、『中日大辞典』に関することもそうなのですが、さらにそれを押し広げ中国語辞典の現状と将来といったようなテーマでお話いただければと思います。所長の立場から言いますと、『中日大辞典』のことをできるだけお話いただき、これを大いに宣伝したいところですが、そういうわけにもいけませんのでよろしくお願いいたします（笑）。

ではまず、当初からこの辞典の編纂に携わってこられた今泉先生に、『中日大辞典』の歴史を簡単に振り返っていただきたいと思います。

■華日辞典編纂処の設立

今泉　『中日大辞典』は一九六八年二月に初版が出版されるのですが、その編集が本格化したのは、一九五五年四月に愛知大学に華日辞典編纂処が組織されてからで、出版までに十年以上かかっています。編纂委員長は鈴木拓郎先生で、私はちょうどその三月に愛知大学を卒業し

たものですから、そのまま専任スタッフの一人として参加することになりました。私の最初の仕事は、中国語から返還された十四万枚のカードを整理することでした。これは華日辞典カードと呼ばれるもので、愛知大学の前身である東亜同文書院時代に作成が開始されました。鈴木先生によると一九三三年に華日辞典の編纂が発起されたそうですが、その頃から日本の敗戦までカード作成は継続され、敗戦と同時に当時の中華民国政府に接収されてしまいます。その後、東亜同文書院関係者により一九四六年に愛知大学が創立されるわけですが、東亜同文書院大学（編者注＝東亜同文書院は一九三九年から大学となった）の学長であった本間喜一先生が愛知大学での華日辞典の完成を強く望まれ、中国側にカードの返還を申し出ることを鈴木先生に相談します。鈴木先生は、カードが接収される時、接収委員であった鄭振鐸先生、この方は皆さんご存じのように著名な文学史家で、後に教育部の副大臣になられた方ですが、その鄭先生に口頭で、将来我々の手で是非華日辞典を完成させたいと伝えたことを思い出し、鄭先生にカードの返還を申し出ることになったわけです。ただ、当時は日中間の国交がまだ回復されておらず、日本中国友好協会を通じて中国側にお願いをしました。この時の協会理事長が内山完造氏で、内山氏はもともと上海に書店を出しておられ、魯迅とも交友があった方ですが、実は東亜同文書院とも関係が深く、例えば、東亜同文書院に華語研究会というのがあって、そこが出していた『華語月刊』なども内山書店を通して日本に送っていたようですし、先生方や書院生もよくそこで本を注文したりしていたそうです。鈴木先生が魯迅に記念講演をお願いしたのも、内山書店でたまたま会われてのことだそうで、同文書院そのものが内山書店をひいきにしていたといえるかもしれません。また、本間先生は友好協会設立の際の発起人の一人でもあり、それでそういう話になったんだと思います。

安部　個人的には、そのあたりのお話をもっと詳しくお聞きしたいところですが、そうもいきませんので、内山氏と魯迅、さらには同文書院との関係については、また是非他の機会にお伺いしたいと思います。とりあえず話を辞典の話に戻していただいて、カード返還の要請を日本中国友好協会を通じて行ったわけですが、現在編纂所には本間先生がお書きになられた返還願いの文書の原本と、内山氏の書かれた文書のコピーが保管されていて、その送付先が当時中国科学院院長をしておられた日本でも有名な郭沫若先生となっています。

今泉　そうです。内山氏の文書はこちらで準備した下書きのコピーで、残念ながら内山氏の書かれた原本ではありません。後に日本中国友好協会にお願いをして探していただいたのですが、よくわからないとのことでした。先ほどお話しした鈴木先生が鄭振鐸先生宛に出された手紙の原稿もあると思います。こうした多くの方々のご尽力があって、「本来なら返還できないが、日中友好の見地に立って日本人民に贈呈する」という形で、一九五四年にカードが返還されたわけです。

　返還後、日本中国友好協会主催の会議が開かれ、最終的にこれを愛知大学にゆだねるということになりました。返還の翌年、学内に編纂委員会が組織され、華日辞典編纂処が設立されることになります。返還された十四万枚のカードのうち、語彙が古くなったものや使えないものが結構あって、すべてを活用したというわけではありません。編纂委員会では、最初に編集方針や執筆

基準などを決めなければならないわけです。これは確か二年ぐらいかけて徐々に決めていったと思うのですが、日本の国語辞典のような辞典を作りたいというのは最初からあって、さらに時代も大きく変化していましたから、カードの語彙に限らずできるだけ幅広くオールラウンドに集めようという方針ができたように思います。こうして編集作業が始まりますが、当初は五、六年、長くても一〇年ぐらいで完成すると考えていました。しかし実際には基礎的な作業だけで一〇年かかりました。その原因は二つあって、一つはスタッフ数と勤務時間にかなり制約があったこと。もう一つは、中国における学術研究の成果をできるだけ反映させようと考えていたことです。よく考えれば、これはきりがない。次から次に出てきますから（笑）。

結果的には当初の予想よりもはるかに長い一三年もかかってしまいました。これは見通しが甘かったこともありますが、本来辞典編集という仕事そのものがやり始めるときりがないということもあると思います。このような点から言えば、辞書の刊行には、編集側のチェックと同時に出版側というか経営側のチェックがどうしても必要ですね。我々は、できるだけ新しい情報を正確に伝えたいという思いが強いので、時に刊行スケジュールを無視したりしますから。

安部　その点は私も今回実感しました。よりいいものを出したいと思う気持ちと刊行スケジュールとの板ばさみになり、かなり苦しい思いをしました。先生方にもかなり無理をお願いして申し訳なく思っています。結局どこかで、エイヤッと出さなければなりませんからね。ただこの問題は、一度出したものに随時改訂が加えられるようになれば、かなりの部分解決できるのかもしれません。この点はまた後ほどお話いただくことにして、初版出版後のことをお聞かせください。

■『中日大辞典』の刊行

今泉　こうして初版が刊行されたわけですが、苦労した甲斐あって、世間から非常に歓迎されたのは確かです。中日新聞社から中日文化賞もいただきました。ところがその後、辞典編纂処は一旦解散します。何とか刊行でき、またそれが好評だったために、少しほっとしたのかもしれません。やはり辞書編集は大変な苦労で、鈴木先生もその後大病にかかったりしましたから。ところが、一九六六年に始まった文化大革命によって、新しい語彙がどんどん出てくるようになり、我々も対応を迫られることになります。これは予想外でした。その後、訪中の機会があり、これが契機となって辞典編纂処が再開されます。ここから増訂版の編集が始まるのですが、これも結局、初版同様一〇年以上かかって、一九八六年の出版となりました。この間に文化大革命が終わり、改革開放で市場経済が導入されるなど中国の体制も大きく変わり、それによって語彙も当然変わりますよね。今から考えると、増訂版をどうしても出す必要があったわけです。ところが編集スタッフは二人だけで、鈴木先生が体調を壊されたので編集主任となり、私が編集委員長となりました。その後新しく何人かの先生にも加わっていただきましたが、やはり時間がかかってしまいましたね。また、一九八二年には鈴木先生が急逝され、その影響も

大きかったと思います。

安部　増訂版が出されたあと、翌年には増訂第二版が出されますね。増訂版で簡化字総表を全面的に取り入れたところ、翌年簡化字が追加されたり、発音が訂正されたりしたため、これに対応したと伺っております。私は増訂第二版が出版された翌年に愛知大学に赴任し、その後編集委員となったものですから、その間の事情はよく知りませんでした。増訂第二版の評判はいかがでしたか。

今泉　これも非常によかったですね。新しい語彙もかなり入れましたし、全体の語彙数も相当多くなっています。ただ、古い語彙を削ったために、そういうところをやっておられる方からは不満も出ました。

安部　これは非常に難しい問題で、紙幅が限られているわけですから、新しいものを入れるためには古いものを削らなくてはいけない。我々にとっては最も悩ましい問題の一つだと思います。今回の第三版でも同様の問題がありましたので、この点については、後ほど改めて取り上げたいと思います。

今泉　増訂第二版も初版同様よく売れたのですが、出版から一〇年以上経つとやはりこれも時代のニーズに対応できなくなってきました。改訂のための基礎作業は続けていたのですが、本格的に第三版の編集が始まるのは、二〇〇二年に編纂所が現代中国学部のある名古屋校舎に移転してからです。

安部　その時、私が所長兼編集委員長となり、今泉先生には編集主幹として引き続き編集をお願いしました。同時に、現代中国学部の先生方にも編集委員や編集協力委員になっていただいたのですが、この時に今日ご出席の吉川先生も編集委員をお願いいたしました。吉川先生はコンピューターに詳しく、増訂第二版を電子辞書化する時にいろいろとお願いしました。

吉川　愛知大学に赴任したばかりで、事情もよくわからないうちに編集委員になっていたという感じです。私自身も『中日大辞典』にはお世話になっていたので、とても光栄に思いました。電子辞書化のときは、やはり初めての試みということでいろいろと大変でした。今泉先生、安部先生の英断ですが、待望のといった感じで、好評だったのではないでしょうか。辞典編纂の大変さ、諸先生方のご苦労を垣間見た気がしました。『中日大辞典』収録の電子辞書は、上級機種としてラインアップされていて、上級者向けとかエキスパート向けといった展開がされているようです。この点はメーカーも市場を意識しているというか、この辞書の利用者、辞書の性格をつかんでいるなという気がしますね。

安部　二〇〇四年には、編集業務をさらに強化するため、顧明耀先生に来ていただきました。顧先生は、すでに日中辞典を何冊も出しておられ、その豊富な経験を今回も大いに発揮していただきました。途中参加ということで、戸惑われることも多かったと思いますが、五年間という限られた時間の中、本当にお世話になりました。本来ならこの三月末で退官され、帰国される予定だったのですが、帰国を半年延ばしていただきました。

この場を借りてお礼を申し上げます。顧先生はこちらに来られる前に、『中日大辞典』にどのような印象をお持ちでしたか。

顧　実は、『中日大辞典』の初版が発行されたのが一九六八年ですが、たぶんその直後に入手してずっと使ってきました。私にとっては最も大きな中日辞典、そういうイメージです。私はこの二、三十年来ずっと辞書のことに携わってきまして、ある大学で一度辞書についての講演をしましたし、また「辞書の間違い」という論文も出しました。これに対して、私の昔の教え子で、今ではある大学の教授をしている人が私に言いました。「先生、もし辞書の間違いということだったら、小さな辞書ではだめですよ。愛知大学の『中日大辞典』でないと論文にならない」と言われたんです。愛知大学の『中日大辞典』が読者の心の中でどれほど重いものがこれでわかるだろうと思います。五年前、私が広島女子大学を定年になった時、ちょうどこういう仕事がありまして、第三版の編集に携わらせていただけたことは、私にとっては非常に光栄なことだと思います。他の辞書もいろいろやってきましたが、五年間連続して、他のことはほとんどやらずに編集に専念したのはこれが初めてです。

安部　顧先生に来ていただき、第三版の編集体制が整ったところで、二〇〇六年に愛知大学は創立六十周年を迎え、その記念事業の一つとして第三版の出版が正式に認められるのですが、初版の編纂が創立十周年の記念事業として認められたことを思うと、何か不思議な巡り合わせを感じます。実際の完成は二〇〇九年になってしまったわけですが。これからはお二人にも加わっていただいて、第三版についてお話いただきたいと思います。

■第三版の特長

安部　ではまず、第三版の特長といいますか、主な改訂点についてお話しください。

今泉　第三版も編集の基本は変わりません。ただ従来と違って一番大きく変わったのは、それぞれの分項というか、項目を分けたことです。複数の発音があるものはそれぞれの箇所に見出し字それから見出し語をおいたということですね。編集の内容からいうとこれが最大の変化ということになると思います。

顧　今、今泉先生がおっしゃったように第三版は分項したんですが、やはり分けた方が便利だと思います。以前だと、調べる時にそこになければもう一回調べなければならない。今回は一発で調べることができる。これは第三版の大きな変更点ですが、非常にいいことだと思います。

安部　分項でより使いやすくなったわけですね。それ以外の点で言いますと、新版になると、大体どの辞書もそうだと思いますし、増訂版の時もそうだったわけですが、語彙に大きな変化があると思うんですね。特に中国のこの二〇年間の変化は非常に大きかったと思うので、そういう部分で苦労された点とか、新語をどのように取り入れたのかと

いった点を少しお話いただけますでしょうか。

今泉　語彙は、これはもう時代に伴って変わるものですから。第三版では特に、『現代漢語詞典』、『応用漢語詞典』、『現代漢語規範詞典』という中国で出されている辞典が依拠すべき文献となりました。それから編集、特に辞書作成の面で言えば、中国では用語や記号の統一などいろいろと規制をかけておりますが、『中日大辞典』は日本で出す辞典ですから、そういう規制に細かなところまでは一致させておりません。我々の独自基準で編集をしたわけです。新語については、拠るべきものをどこにするかということで議論がありました。先ほど言った三種の辞典がいずれも比較的新しいものでしたので、これらの中に含まれていれば、当然『中日大辞典』にも入れる必要があります。それ以外にも各種各様の新語辞典というのが出ておりまして、どれをとるかは相当な問題で、結局、比較的信頼できるもの一冊を参考のメインに置きました。

顧　新語については三種類あります。一つは比較的定着したもので、これはほとんど取り入れました。次は他の辞典にはないような本当に新しい語彙ですが、第三版にはある程度入っています。もう一つは、その意味が定着するかどうかまだわからないような新語です。もしかしたら三年、あるいは五年だったら意味が変わるかもしれませんし、二、三年経ったら死後になるかもしれません。我々は新語を採用するとき、インターネットでチェックしていますが、新しい語彙ですから市民権をもっているかどうかわかりにくい。そういう新語もあります。

安部　新語の扱いはなかなか難しいですからね。大まかな数字で結構ですので、今回だいたいどれくらい新しい語彙が増えたのでしょうか。

今泉　まだ精査しておりませんが、三分の一は替わっただろうと思います。新語というわけではないんですけど、出典が明らかでないものを思いきってカットしましたので、それらを削った分は何らかの形で新しい語彙が入っております。ですから、ここ十年ぐらいの間に新しく出た、または新しい意味を付与されたという新語は三分の一もないかもしれませんが、従来の初版や第二版に載っていなかったというものまで入れますと、三分の一は替わったんじゃないかと思います。大雑把にいいますと、全部で十数万語ですから五、六万語は入ったであろうと。それからもう一つ。我々スタッフ以外に愛知大学の同窓生の方が、それこそ献身的にというか、ボランティアで多数の新語を集めて送ってくださいました。新語の一部にはこれらも入っています。

安部　それ以外に何か特長はありますでしょうか。

顧　他の辞書、特に中型以上の辞書はたいてい複数の方が分担してやります。主編者がすべてに目を通して加筆訂正している場合があるかもしれませんが、ほとんどがそうではないと私は思います。私は日中辞典を多く手がけてきましたが、こういう研究を少しやったことがあります。例えば月曜日から日曜日までを全部辞書で調べてみたら、ほとんどの辞書はその説明がばらばらです。「日曜」だけ、あるいは月曜の時は「月曜日」、火曜日は「火」のところで説明する。統一されていない。なぜかというと分担するから

です。日本語の「こ・そ・あ・ど」も私は調べてみました。そういうものも説明が統一された辞典はほとんどないです。例えば、「こんな」、「こんなに」。これを一つの単語にするか、二つの単語にするか、それぞれ違う。「あんな」「あんなに」は一緒。しかし「こんな」の場合、「こんな」はあるが「こんなに」はない。「そ」の場合は、「そんなに」はあるが、「そんな」がない。この点、今回の第三版は、最初から最後まで主幹の今泉先生が何十年もかけて目を通し、加筆訂正してこられました。その点から言いますと、他の辞書と違ってバランスをとりやすい。一人でも長年やれば最初の頃と後の方では少し違うところがあるかもしれませんが、でも大勢で分担してやるよりはいいと思います。これは『中日大辞典』が他の辞書と全然違うところだと思います。

安部　ありがとうございました。第三版は、百科事典的な性格など基本的な編集方針は変わらないものの、形式の上でも、また内容面でもかなり大幅な改訂が加えられていること、さらには全体を通して編集主幹の今泉先生のお考えが反映されているということですね。

顧　もう一つ。これは第三版の特長というより、『中日大辞典』の特長といった方がいいかもしれません。『中日大辞典』以外にも中日辞典は何冊もあります。ただその目指しているところは日本人でも中国人でも使えるということだと思います。実は日本人の立場で見た中日辞典と中国人の立場で見た中日辞典は違うと私は思います。中国人が中日辞典を調べるとき、中国語の意味は分かっています。ただ、どういうふうに日本語で表現するか、そのために調べることが多いのではないかと思います。しかし日本人の場合は、その中国語がどういう意味か、あるいはどういうニュアンスを持っているか、そういうことに重点があるのではないかと思います。ですから同じ中日辞典が、中国人にとっても最適、日本人にとっても最適というものは、まずあり得ないと思います。いま市販されている辞書は、中国人も使いますし日本人も使いますが、結果的にはどちらにもちょっと足りない部分があるのではないかと思います。私がこの数年間こちらでお手伝いさせていただいて痛感したのは、『中日大辞典』は日本人のための辞典だということです。これは中国人のためのものではない。もちろん中国人が使っても結構プラスになりますけれど、でも出発点は日本人のためというのが私の感想です。中国人だったら見ればわかるけど、日本人だったらわからない、そういう語彙も入っています。中国人のための中日辞典とはちょっと違うというのが私の感想です。

■中国語辞典の現状と今後

安部　これまでは『中日大辞典』のことを中心に話していただきました。次にもう少し広く中国語辞典の現状と今後についてお話いただきたいと思います。今、顧先生が指摘されたように、日本人が使う中日辞典と中国人が使う中日辞典は異なるべきなのに、多くの辞書が両方を追い求めた結果、中途半端になっているという現状があるとすれば、

今後中国語辞典がよりいいものになっていくためにはどのようにすればよろしいでしょうか。この点について、今泉先生、何かお考えがあればお聞かせください。

今泉　ここ二〇年ぐらい、主として日本で言いますと、顧先生の指摘された点があるにしても、レベルの高い中国語辞典が一応出ました。まだドイツ語、フランス語のレベルには達していないかもしれませんが、何といっても日本の中国語辞典は、辞書学的なレベルが低いところがありましたから、それを頑張って一定のレベルに急速に引き上げましたよね。と同時に、例えば文法的な機能に詳しいとか、用例が豊富であるとか、いろいろな特長をもった辞典も数は少ないにしても出ております。このことを踏まえていくと、次にどんな形で日本人のための中国語辞典というものが追求されるべきなのか、これは大きな問題点だろうと思います。ただ、多様性、汎用性というよりも、どうもそれぞれの向き、専門性といいましょうか、そういったものを追求したもの、つまり個性的ということにもなりますけど、そういう辞書がいくつか出ることは大事なことだと思います。これは電子辞書のところでもたぶん問題になりますけど、例えば一つの単語を検索すると、五種類の辞書の意味が同時に見られるようになった場合、その次は違うものが必要かなあという感じはしないでもないですね。ただ、本国の中国における辞書のレベルがさらに上がることは確実ですので、例えばコーパスのようなコンピューターを使ったものが出てくると、今の問題に新しいヒントを与えてくれるかもしれませんね。

安部　顧明耀先生は中国の辞書の状況にお詳しいと思いますが、そのことを踏まえて先生はどのようにお考えでしょうか。

顧　今泉先生がおっしゃったことに私も同感です。要するに辞書は、私の考えでは、誰のための辞書がということが大切だと思います。先ほど申し上げましたが、『中日大辞典』は明らかに日本人のための辞書です。その上で、日本人の何のための辞書かということもちょっと考えなければならない。私の考えでは、『中日大辞典』は日本人のための辞書ですが、さらに、読むためのものつまり読解用と書くためのものつまり表現用のものがあると思います。『中日大辞典』は表現用ではありません。今出されている多くの辞書は、その両方を狙っていて、結果として中途半端な気がします。もし語彙量が一万程度の小型辞典で、完全に学習者向けのものであれば、両方ねらうことは可能でしょう。しかし、読解用としては語彙量が少なすぎます。語彙量が増えると作文のための情報が入らなくなってしまう。ですから目的によって編纂することがたぶん必要ではないかと思います。

吉川　確かに今の紙辞書には量的な制約があるので、両方を狙うことは難しいかもしれませんが、電子辞書になるとその制約が薄れるので、可能になっていくかもしれませんね。ただ、そうする必要があるかどうかは別の問題ですが。

顧　電子辞書については私なりの考えがあります。電子辞書は調べやすいし、持ち運びが便利なので、多くの人に愛用されていますが、私は実際あまり使っていません。なぜかといいますと、一つの単語を調べる時に、その周辺の情報が見にくいという問題があ

ります。辞書は引くものですから、読むものでもあるんです。ですから私は、学生には紙辞書を薦めています。

安部　確かに、現状では紙辞書にも電子辞書にも一長一短がありますね。ただ、電子辞書の普及率を考えると、辞書の編集者としても対応を考えなければなりません。

顧　話を戻しますが、もう一つ例文の問題があります。例文の中にはかなり古いものもあれば、新しいものもありますが、これは読者にはわかりにくい。もしその辞書を使って作文する場合、場合によっては自分の書いた文章の中に、古い表現と新しい表現が同時に出てきてしまう。でも、読解用であれば問題ありません。ですから先ほど今泉先生がおっしゃったように、辞典はやはりいろいろな必要に応じて使い分ける。我々も読解のためか、表現のためか、それぞれの用途に合わせて個性のある辞典を作らなければならないと私は思います。

今泉　今、顧先生の指摘された『中日大辞典』は読解用の辞典であるという点はおっしゃるとおりで、初版以来の特長で、鈴木先生のお考えもそうだったと思います。特に私なんかは中国語を耳からあるいは口からというよりもやはり文字を通して覚えましたから。一般的に日本人は二千年来、文字を通して、つまり漢字を通して中国語を知るというのが基本で来ました。我々が中国語を教える場合、ドイツ語やフランス語と比べて何が決定的に違うかというとこの点です。日本語の中に漢語が入っている。このことから日本語が逃れられないという、これがやはり非常に大きな影響を与えていると思います。読解を中心とするというのはつまり二千年来の歴史なんですね、簡単に言うと。そうしますと例えば、時系列でいうとこの語がこういう異なる形をとっているというのを、つまり異形字ですね、これをずらっと並べたほうが、日本人にとっては、少なくとも文字から中国語を知るという場合は、ごく常識的に必要だろうと思います。ただこれは、人によってはばかばかしいことで、今使われているものを残し、その他は排除すべきということになるかもしれません。

顧　私はばかばかしいとは思いませんし、読解用であれば当然必要だと思います。私も先生と同感で、日本人のための中日辞典は、他の外国人のための中日辞典、あるいは中国人のための中日辞典とまったく同じであってはいけないと思います。

■品詞分類について

安部　最近では、先ほど今泉先生もおっしゃられたように、様々な出版社から質の高い辞書がたくさん出ています。そこにはいろんな工夫が凝らされており、以前はなかった図版や写真が入ったり、印刷にしてもカラー印刷などを使って見やすく工夫されています。また、『中日大辞典』にはないものとして、品詞分類が多くの辞書で付されるようになっております。この品詞分類はなかなか厄介な問題があるのですが、例えばその点について今泉先生はどのようにお考えなのでしょうか。

今泉　品詞の問題も先ほどの話と若干絡んでいると思います。つまりこれは中国の方も認めておりますけど、例えば先ほどの三種類の権威ある辞典が、同じように決めている時はいいんですけど、そうでない場合が当然出てきます。同じ形容詞でも、日本語の場合、形容詞と形容動詞はどう違うかという問題が出てきます。文法論でいうと、今度はその形容詞が本当に形容詞かというようなことも出てきます。そういう問題点がどうしてもありますから、『中日大辞典』はそのことに完全に背を向けました。積極的に背を向けたというか、採用しないという方針で来ました。しかしこれも、品詞分類を含めて語の認定の基準を厳密にすれば、例えば「兼詞」ですが、二つ以上になってくるものを排除して形容詞と名詞という二つの品詞のみにしたり、中枢となる、これだけは絶対に譲れないというものだけを選んで編集するということも可能かもわかりません。こうすると中国で出ている辞典と基本的に一致するかもわかりません。だけど私は、これはもう個人の考えが大きく影響してきますけれど、品詞分類とその読解が、漢字が日本に与えた影響といいますか、日本語の中にある漢字との違いといいましょうか、その共通性と非共通性といいましょうか、そういう問題から逃れられないということが強く働いています。この点については批判があるところで、第三版もその点では当然その批判は甘受すべきであろうと思います。

安部　品詞分類は、批判を覚悟の上で、意図的にそれを排除しているということですね。

今泉　そうです。それから先ほど顧先生がおっしゃった点ですが、「A」から「Z」まで全部一人で見る場合にはプラスの面とマイナスの面があって、私自身は非常に自分の力不足を痛感しています。これまで多くの方々の協力があってこうしてやってくることができたわけですが、果たして、神様以外の限界のあるものが、一人で割り振ってしまっていいのか、自己の判断だけでやるのはどうかなと、そこまで考えていきますと自己矛盾です。かといって、五人が五分の一ずつ分担しても、どこかで統一しなければいけないということになります。そうすると、例えばある辞典がそういう作業をしていますが、いわゆる見出し語と見出し字の部分で分担するというのも一つの手だと思います。ただ、これにもいろいろと批判があり、それは免れない。ですから、これからの辞典は可能性としては今言ったようなことがそれぞれのところで追求されるべきだろうと思います。それから、辞典の編集と出版は別ものですよね。出版するには当然お金がかかります。それを考えると、私も顧先生もそうだと思いますけど、作る側から言えば一つの夢にしか過ぎないんです。こうあればいいなあということだけで、それが実際に辞典の形をとるには非常に困難が大きいというか、実現性が少ないということになります。

顧　確かに出版するというのは大変ですから。

　先生が先ほどおっしゃった品詞のことについて、ちょっと私の考えを申し上げたいと思います。最近の中国語の辞書にはほとんど品詞分類がついています。今泉先生がおっしゃったように、辞書によって品詞が違う場合があります。例えばある語彙を最初は名詞としているのに、あとで接辞として名詞ではないという。『現代漢語詞典』にもあり

ました。品詞分類は確かに難しいことですけれども、しかしやはりこれは何のための辞書かということを前提にして考えなければならないと思います。『中日大辞典』は読解のため、閲読だけのための辞書だと考えれば、品詞はそんなに強調しなくても差し支えないかもしれません。もし中国語で何かを表現するのであれば、やはり品詞が必要だと思います。『中日大辞典』の場合でも、文法について詳しいところは非常に詳しいです。例えば方向補語の使い方とかあるいは数量詞の数え方とか、場合によっては普通の文法書ぐらい詳しく説明しています。その点から見れば、それは学習者のためです。しかしもう一方で、基本的な品詞分類のことには触れていない。触れていないというのは、ただはっきりと書いていないだけだと私は理解しています。その語釈、説明の方法から見れば、品詞のことを考えているのは明らかです。私は読解用としてはこれでいいのかなと思います。ただ表現用だとそうはいきません。同じ意味をもつ言葉はいくつかありますが、一〇〇％同じことはまずない。意味の幅が違う、他の語との結びつきが違う、品詞が違う、ニュアンスが違う、マイナスイメージかプラスイメージかが違うなどいろいろあります。もし表現のための辞書だったら、そういうことをはっきり示さないと読者にはわかりません。『中日大辞典』はやはり読解用ですから、読者にはまずこういうことを念頭において使ってほしいです。どんな場合でも同じように使えるというわけではまったくないのです。

■コーパスの活用と電子化

安部　おそらく使っておられる多くの方も、その点はある程度理解していらっしゃるのではないかと思います。実際にこの『中国大辞典』を使っていらっしゃる方を見てみますと、例えば初めて中国語を勉強するという方よりも、ビジネスで実際に中国語を使われている方ですとか、あるいは中国研究者、それから学生でいいますと、専門課程に進んでちょっと難しい論文ですとか小説を読むときに利用しているようです。それから先ほどの話になりますが、この辞書の大きな特長は百科事典的な性質です。できるだけ多くの語彙を入れようというコンセプトで作られています。要するに他の辞書で引いて出てこない語彙が『中日大辞典』では出てくるというのが大きな特長になっていますし、実際私も学生時代からその恩恵を被った者の一人です。確かに、顧先生が今おっしゃったような細かな点について、すべての方に本当に理解していただけているかどうかとなりますと、断定はできませんが。また文章を書くとなると、全然違った意味を持ってくると思います。例えば、語の軟らかさ、硬さみたいなものも実際に使うときには本当に重要で、ある語彙がどのようなシチュエーションで使われるかを知る必要がある。これは有名な話ですが、国交回復の交渉時に、「中国国民に多大なご迷惑をおかけした」という部分を、通訳者が「添了很多麻烦」と訳して問題になった。辞書には「面倒をかける」＝「添麻烦」という形で必ず出てくるわけですが、実はそれがどのようなシチュエ

ーションで使われるのかということも、大切になってきます。それをどこまで辞書が網羅できるかというと、やはり大きな問題が残るとは思うのですが、表現用ということであれば、そういうことも考えていかなければいけないでしょう。実際に岩波書店の中国語辞典はこの点に配慮しています。ですから、それぞれの辞書がそれぞれの特色を持つことと、使う側がその特色を理解した上で使うことがとても重要になってくると思います。またシチュエーションということを考えるなら、先ほど今泉先生も触れられたようにコーパスの活用ということも出てくると思います。この点について、吉川先生はどのようにお考えですか。

吉川　英語辞典ではすでにコーパスの活用が進んでいて、その便利さは多くの人が実感していると思います。中国語辞典でも今後その活用法が問題になってくると思いますが、まずは常用語とか基本的な語彙に、コーパスによる成果などを取り入れるのもおもしろそうですね。あと、中国でも大型のコーパスが整備されてきてもいるようです。またコーパスを利用するソフトとしては、語の頻度や共起を検索するといったコンコーダンスソフトウェアなどがあります。やはり、英語が主だった気がしますが、オンラインも含め、個人ユース、研究ユースでも使えるソフトウェアも出てきています。有償、無償のソフトがあるので、興味がある方は、無償というか、フリーウェアを利用してみるのもよいと思います。コーパス言語学の裾野が広がっているなという気がしています。

安部　今後、中国語辞典についても、コーパスの活用というのは大きな課題の一つになってくると思います。では、電子辞書についてはどうでしょうか。

吉川　国内では、確か二〇〇四年だったかた、出荷台数が二〇〇万台ペースを超えてから、火がついたみたいですよ。各社、入門から上級まで、搭載する辞書や機能に応じて製品構成を工夫しているようです。最近、あまりチェックしていなかったのですが、日本メーカーの中国向け製品もおもしろいようです。

安部　ジワリというより、あれよあれよで普及した感じがありますよね。愛知大学の場合、二年生で中国に語学研修に行くので、そのことを考えて電子辞書を買う学生もけっこういるようです。持ち運びに便利ですから。

吉川　ええ、そうですね。先ほど今泉先生が触れられていたように、複数の辞書を串刺し検索できるモデルもあって、便利になりました。あとは手書き認識ですね。学生を見ていると、画数で引かずに、文字認識機能、それと音声機能も使っているようです。私も学生時代は、中国書を読むときには、『中日大辞典』もそうですが、『現代漢語詞典』などの中国の辞書も机の上に何冊も並べて、さらには初版とか前の版も引いて、これはどういう意味だろうと考えていました。入門段階の時は薄い辞書から始めて、様々な辞書をそれこそ引き倒したといいますか、それぞれの特色を味わってきたというところがあります。今ではそれが、電子辞書ひとつでできてしまうわけですから、本当に便利な時代になってきましたね。あの頃の苦労が懐かしい気もします。個人的な要望なのですが、『中日大辞典』のこれまでの各版が串刺し検索できるといいかなと思います。もし

もですが、辞書に入れるのを断念した、あるいはカットした語彙まで検索できると、とてもおもしろいですね。

安部　その問題については、例えば『中日大辞典』を基にしたデータベースの構築といったことも考えられるのではないかと、個人的には思っています。

吉川　顧先生が、先ほど挙げられていた一覧性についてですが、電子辞書は画面サイズが小さく、これは決していいことだと言えないですよね。ただ今後、例えばＡ４サイズの電子ペーパーやタッチパネルといった、新たなデバイスの動向によっては、現在の製品とは違った電子辞書が出てくるかもしれません。私はジャンプ機能やら、あいまい検索で遊んだりもしています。

顧先生にお伺いしたいことがあるのですが、例えば先生がお考えの究極の一冊、それも紙とか媒体の制限がない場合、理想的な辞書っていうのはどういう形が考えられるかということです。

■理想的な辞書と『中日大辞典』

顧　それは非常に難しい質問ですね。私は日本に来る前、基本的には日本語教育をやってきました。国家教育委員会、教育部に頼まれて教材を作りました。教材を作ると同時に、教材のための文法書と辞書も作らなければならない。その時に作った辞書はまったくの学習用の辞書ですから規範でなければならない。こういうふうにも使ってもいいし、こういうふうにも使えるといった表現は極力避け、このように使いますという表現になります。品詞とか意味も。そういう辞書を作りました。日本でも売っていますし、台湾でもすぐ出版されましたが、今考えるとその利用者層は非常に狭いです。これはあくまでも学生用の辞書ですし、理想の辞書というわけにはいきません。

『中日大辞典』のことで言いますと、これから完璧にする余地もまだありますが、例えば表現用の『中日大辞典』も企画したらどうかと思います。また、私は初版も第二版も使わせていただきましたが、私の感じとしては、文学、古典を読むなら初版の方が使いやすい。もちろん今から見れば間違いや不備なところがないわけではありませんが、でも貴重な部分もかなりあります。第二版にはプロレタリア文学の言葉が結構入っています。それらを、例えば今の中国の若い人に言ってもわからないものがたくさんあります。だから過去のある時代の語彙を集めた時代別辞典のようなものもあればいいと思います。今回の第三版はプロレタリア文学に出てくるような語彙は、一部を歴史的な単語として残しましたが、あとはカットしました。カットすることは第三版にとっては必要な作業でしたけれども、プロレタリア文学を研究する人にとってはもったいないような感じがします。ですから辞典編纂所としても、もう少し高いレベルを目指して、『中日大辞典』をより完璧にすると同時に、表現用や時代別といった新しい辞典を作っていけば、愛知大学の中国語辞典は日本一どころか世界一になると思います。

今泉　例えば、自動車を考えた時、それぞれのメーカーが用途別に実に様々な車種を出していますよね。辞書と自動車を一緒にはできませんけど、それぞれの用途に向けた特長を持ったものが必要で、さらに基準を明確にして、後部ワイパーはこの車種にはあるけどこれにはないといったことが、ユーザーにもよくわかるようにする。自動車の場合は主としてお金儲けですけど、辞書の場合は、その基準というか、スタンダード作りと理論化に愛知大学が貢献できるのであれば、それは顧先生のおっしゃるように世界的な寄与になります。具体的にものを作ることは大変なことですけど、辞書学の理論化とスタンダード作りの方は、総力を結集すればひょっとすると可能かなと思います。皆さんもおっしゃっていますが、古典をやる人は黒の初版を、プロレタリア文学をやる人はやっぱり赤の二版を、汎用向けは青の第三版ですよ、在庫ありますよ、といったふうにやればいいんですよ（笑）。それを、語の基準とか品詞分類も含めて、それぞれの辞書の特色をもう少し整然とした形に整理できれば、それは非常に大きな貢献になるかもわかりませんね。愛知大学はせっかくこれまで六〇年間も辞書編纂をやってきましたから、それなりに蓄積されたものがあるはずで、何か辞書学的な理論の構築といいましょうか、それが必要かなと思います。

吉川　その上で『中日大辞典』の体系化といいますか、シリーズ化を行うということですね。

今泉　ええ。そういうものが出ればいいですね。

吉川　紙辞書で歴代築いてきたものがフラッグシップ、その系列に電子辞書もあって、これには時代的、技術的な制約もあるわけですが、つまりこれまでの辞書作りの蓄積は中心にあり、その特色が分化していく中で『中日大辞典』スピリットとでもいうものが体系化できていくのかなということは、編集委員となり先生方に面倒を見ていただいている中で感じていましたし、そのスピリットが、この編纂所の一番の大きな役割である次の辞書を生み出すジェネレートというか、動力といいますが、そういったものじゃないかなと感じているところだったんです。安部先生、いかがですか。

安部　そうですね。私も編集委員となって随分経ちますが、今回は所長として第三版の編集、出版にかかわって、『中日大辞典』に対する思いがかなり変わりました。今、吉川先生が言われたように、これまでのその編纂に尽力してこられた、今泉先生や顧先生、その他多くの方々の熱い思いを、辞書編纂の大変さとともに本当に肌で感じることができました。と同時に、そういうスピリットを決して絶やしてはいけないという、強い責任も感じています。先ほど顧先生がおっしゃられた、表現用あるいは時代別の『中日大辞典』の編集の問題や、今泉先生がおっしゃられた、用途別辞典の理論化とスタンダード作りの問題など、我々がやらなければならないことはまだまだあります。さらには、電子化の問題や、これまでカットしてきた語彙や入りきらなかった語彙を加えたデータベースの構築なども考えていかなければなりません。これらの問題を、吉川先生を含めた新しいスタッフの協力をあおぎながら、すべて実現するのは難しいとしても、これま

で同様、実現に向けて少しずつ努力していくことが大切だと思っています。『中日大辞典』の伝統の上に、辞書の将来を見据えた、新たな挑戦をしていきたいと思います。

なお、本日今泉先生にお話しいただいた『中日大辞典』の歴史について、さらに詳しくお知りになりたい方は、『中国 21』Vol・18 に今泉先生のインタビュー記事がありますので、そちらをご覧いただきたいと思います。

先生方、本日はありがとうございました。

（二〇〇九年七月二一日）

（テープ起こし＝宮田千信、文章整理＝安部　悟）

〔注〕愛知大学現代中国学会編『中国２１』Vol.32（二〇〇九年一二月）所載。

愛知大学と『中日大辞典』～第三版の刊行をめぐって～

安部　悟

●愛知大学と『中日大辞典』の歴史

上海にあった愛知大学の前身・東亜同文書院は非常にユニークな学校で、中国語教育や中国研究の面で当時としては第一線級だった。その中に華語研究会というのがあり、一九三三年頃から華日辞典を作ろうと語彙の収集を始めた。

その後、戦争になり、収集した語彙のカード十四万枚は、敗戦で中華民国政府によって接収されてしまった。一九四九年に中華人民共和国が成立し、翌年当時の本間学長がカードを返してもらうことを発案。中国の鄭振鐸先生や郭沫若先生、日中友好協会の理事長だった内山完造先生らにお骨折りを頂いて、日中友好のため、カードは日本に返されることになった。

カードの返還を受けて、関係者で協議した結果、愛知大学が編纂して辞書の形にすることが決まった。一九五五年、華語研究会のメンバーだった鈴木擇郎先生を中心に華日辞典編纂処が創立される。

編集方針としては、広辞苑のような辞書、その中国語版のようなものを作りたいということが最初からあった。返還されたカードの語彙は使えるものは使い、なおかつその時代に必要な中国語の語彙を新たに集め、分りやすい解説を付ける。古いものから新しいものまで幅広く、まさに百科項目的な辞書にして、多くの人が中国語を理解する一助としたい、という強い思いがあった。解説は少なくして、できるだけ多くの語彙を入れようという、その伝統は今も強く生きている。

実際に初版が出たのが一九六八年で、翌年には中日文化賞を頂いた。辞書というのは作っている間にもどんどん語彙が変わっていく。中国の体制が変われば、制作も変わり、語彙や漢字などにもその影響がある。それを追いかけていくと、なかなか出せない。最終的には、編纂処ができてから十三年かかった。

初版は非常に好評で、大体六万冊出ている。私も大学の時にこの初版本を愛用した一人である。今は色々なところから中国語辞典が出されているが、当時は本格的な辞書はほとんどなかった。少し古い小説などを読む時には、『中日大辞典』にしか載っていない語が沢山あった。

初版出版の後、編纂処は一旦解散するが、すでに中国では文化大革命が始まっており、それに関連した新しい単語が出てきて、それらに対応できなくなった。その後訪中したりして新たな辞書を作る必要があると、一九七五年に再び辞典編纂所を起ち上げて、改訂版の編集に取り掛かった。

八六年に出版された増訂版は、実は一年しか出ていない。出した直後に中国で新しい

簡化文字七字の追加発表があり、更に発音などの訂正が五十幾つ出て、そのために刷り直すことになった。翌八七年に増訂第二版が出される。増訂版の表紙は従来と同じ濃紺だったが、増訂第二版は真っ赤で、まさに中国をイメージさせるものだった。

●第三版の刊行

それからまた二十年以上が経ち、今年の二月末に第三版が出された。初版は三〇年代に集められたカードが基本となっているので、古い語彙が豊富に入っていた。赤い増訂第二版は文革関係の言葉が大量に入っている。今回第三版を作るに当って、これらの語彙をどうするかが大きな問題になったが、我々は基本となるものだけを残しで、あとは大幅にカットした。

その代わりに新語を大量に入れた。

『中日大辞典』は語彙が非常に豊富なのが売りの一つである。最近では学習者向けの辞書が沢山出ており、書店に行けば、分厚いものからポケットタイプまで、中国語関係の辞書がずらりと並んでいる。中国語や中国が注目されている証拠だと思うが、『中日大辞典』はそういう辞書とは違うスタンスを一貫して貫いてきた。初学者向けの辞書は基本的には文法説明が詳しく、見やすさを追求して、イラストや写真を入れたり、カラー刷りしたりしている。今回の『中日大辞典』は、体裁が多少変わったものの、中味はこれまでの伝統を守り、初学者向けというよりは、プロフェッショナル、つまりビジネスマンや研究者が実際に使うことを意識して作られている。

この『中日大辞典』は、海外でもよく名前を挙げて頂く。特に中国では日本語を学ぶ方たちに、これで勉強したという方がかなりいるし、研究者の評価も高い。また、幅広い分野の語彙を収集しているので、様々なシチュエーションに対応できるようになっており、実際にビジネスの現場でも使って頂いているようだ。今回の三版も好評をいただいており、売り上げの方も順調である。

●未来の『中日大辞典』

技術的な問題があって、紙辞書はこれ以上厚くできない。初版本や増訂第二版、それぞれが持っていた良さを保ちながら、新たな語彙を如何に入れるかが大きな問題である。中国のこの十年・二十年の変化は非常に激しいものがあって、文革期に使われていた語彙の中にはほとんど死語のようになったものがある一方、近年ＩＴ関連など色々な新しい語彙が大量に出てきた。また、新語といえどもすぐに消えていく語も沢山ある。どの新語を入れるかが重要な問題になる。厚さに限りがあるから、新語を入れるためには、同じ量の語彙をカットしなければならない。この何を切るかが実は一番悩ましい問題で、今回厳選した三万語の新語を入れたが、逆に言うと三万語を落とさざるを得なかった。

新たな語彙を入れるにも、古い語彙をカットするにも、どちらも明確なポリシーが必要である。

我々は、古いところをやる方は初版を、文革のことをやる方は増訂第二版を、新しいところを勉強するなら第三版をと奨めている。三冊の良いところを全部まとめたらと言われるが、紙辞書ではそうはいかない。

ただ、今の時代、紙辞書そのものが岐路に立たされている。私は、紙辞書は永遠になくならないし、なくなってほしくないと思っている。なぜなら現状の電子辞書だと、どうしても調べるためだけのものという感じが強い。辞書は読んで楽しむものであって、単に引くだけの手段にしてはもったいない。辞書には多くの先達の叡智が詰まっており、慣れ親しんで、何かの折に引いては色々な発見をしていくものだと思う。そうは言っても、重いので今の学生は持つのを嫌がる。すぐにというわけにはいかないが、今回の第三版も電子辞書化を一応考えている。

最近はコンピュータを使ったコーパス言語学というものがあり、膨大な量の新聞・雑誌・小説をコンピュータに取り込み、使用頻度などが一発で分るようになっている。従来の辞書だと、最初に名詞が来て次に動詞が来る。その名詞がほとんど日常で使うことがなくても、まず名詞からである。それがコーパスを使えば、頻度順に並べることができるし、作文をする時に役に立つ情報も色々と得られる。そういうコーパスの活用が、今英語の辞書を中心に進んでいるが、中国語辞書にもこの波が押し寄せてきていて、今後どのように活用していくかが問題になっている。

辞書を作文用・読解用の二つに分けるとすれば、『中日大辞典』は後者、文章を読むためのものだと考えている。作文用であれば文法説明も必要だろうし、品詞も明記すべきだと思う。今の多くの辞書が、作文用でもあり読解用でもある辞書を目指しているが、実際には中途半端である。作文用となれば、もっと徹底的にコーパスなどを利用しないと、実際に使う場合に困る。そうなると、作文用の辞書は今後別の形をとっていくのではないか。

それに対し、『中日大辞典』は読むための辞書である。このスタンスは是非守っていきたい。できるだけ多くの語彙を入れ、最終的にこれを引けばどんな語彙でも載っているようにしたい。紙辞書では限界があるならば、その限界を他の方法で解決する。それが可能であれば、愛知大学が考える一番理想的な中国語辞書ということになる。紙辞書を残す一方で、そういうものを考えておく必要がある。

そこで、データベース化を検討中である。初版や増訂第二版・第三版の語彙が全部見られるようにすれば、多くの人にとって一番使いやすいものとなるだろう。そのようなものも大学として検討して、将来に備えていこうと考えている。

二〇一二年には、現代中国学部のある愛知大学名古屋校舎が笹島に移る。笹島のキーワードとなる「国際化」に、『中日大辞典』が少しでもお役に立てればと思う。

『中日大辞典』には長い歴史がある。一九三三年の語彙収集からスタートし、中国や

日本の数多くの方々の協力を得て、今回第三版が出せた。この伝統を絶やしてはいけないと強い責任を感じている。我々の使命はまだまだ終っていない。データベース化も含めて将来を見据え、愛知大学の大切な財産を引き続き皆様方にご利用頂ければと思う。それを通じて中国との橋渡し、更には世界の橋渡しができればと考えている。

〔注〕第三〇六回産学官交流サロンにおける講演。ＭＩＫＡＷＡ－ＮＡＶＩ　２０１０　ｖｏｌ．４７　所載。

「中日大辞典」第3版の刊行

愛知大学名誉教授
今泉　潤太郎

変わる中国の現状を反映

『中日大辞典』第3版がこのほど出版された。

愛知大学が編纂・発行するこの辞典は1968年に初版が刊行された。その際に中国語研究の泰斗・倉石武四郎東京大名誉教授が寄せた推薦のことばに、こんな一節がある。

「この辞典は、かつて日中両国のあいだに介在し、数奇の運命をたどったが、それはやがて両国文化交流の使節たる資格を付与される所以となった」

私事になるが、愛知大学を卒業した55年に学内に設置された華日辞典編纂処（現・中日大辞典編纂所）に勤めたことから、私の人生は定まったと言っても過言ではない。初版から第3版まで編集・出版に一貫して参与した関係者は今では私のみとなった。この辞典の「数奇な運命」を振り返ってみたい。

接収された原稿カード

20世紀初頭、中国関係の人材養成のための高等教育機関が上海に設立された。東亜同文書院である（後に大学に昇格）。その華語研究会で33年ごろから中国語辞典の刊行が構想され、原稿カードの作成が進められた。このカードは戦後、当時の中華民国政府に接収されたが、その時点で約14万枚に及んでいた。

敗戦で引き揚げた東亜同文書院大学の教職員・学生を主体として46年、豊橋市に創設されたのが愛知大学である。中華人民共和国が成立した翌50年、愛知大学は原稿カードの返還を新中国政府に願い出た。この年6月には朝鮮戦争が起こり、米中両軍がついに戦火を交えるに至った。緊迫した国際情勢の下、わが国はまだ占領下に置かれ、中華人民共和国とは国交もない状況であった。

愛知大学は創立から日も浅く、困難な経営を強いられていた。その中で行われた返還願いは、東亜同文書院大学の責任者でもあった本間喜一学長の並々ならぬ責任感と強い決意の現れと見られる。

返還の要望は、日本中国友好協会の内山完造理事長を通して中国科学院の郭沫若院長らに行われた。これら関係者の熱意と尽力により、カードは54年「日本人民に贈呈する」形で返還された。

付託された愛知大学では、華語研究会の責任者であった鈴木擇郎教授が委員長となって辞典編纂にあたった。大学を卒業したばかりの私は、カードの整理作業に追われた。13年にわたる編纂の結果、『中日大辞典』初版が出版された。カードの作成から三十数年をへて辞典は完成したことになる。

社会主義に転換した中国では社会全般にわたる大変革が進み、言語の様相を一変させていた。例えば「老爺」（だんな様）、「太太」（奥様）は「愛人」（夫または妻）、「同志」に変わった。『中日大辞典』初版はこの変化に対応して、簡体字を全面的に使用し、新時代の息吹が伝わる本格的な中国語辞典として世間に迎えられた。

文革の新語収録し増訂

しかし、中国では66年から世界を震撼させる文化大革命が起こっていた。文革もまた数多くの新事象、新語を生み出し、「開門辦学」（社会に出て学ぶ）や「上山下郷」（大学生らが農山村に定住する）が叫ばれた。その終焉から10年後の86年に出版された増訂版では、これに関連する語彙も多数収められ、初版にも増して中国事典的な性格をもつ辞書として評価された。

今度出版した第3版は、「改革・開放」のスローガンを掲げ目覚しい発展をとげる中国の現状を踏まえて、全面的に内容を見直した最新の中国語辞典である。

中国はいまや「高技術」（ハイテク）産業社会に突入し、「手機」（携帯電話）から「私家車」（マイカー）、「緑色汽車」（エコカー）までものが当たり前になり、「奥運」（オリンピック）や「世博」（万博）の開催で「文明」（マナー）が問題とされる。

『中日大辞典』は現在までに5千冊以上が中国へ寄贈され、大学や中国日本友好協会、駐日中国大使館などで広く活用されている。「日中友好の船、文化交流の懸け橋」と呼ばれる所以である。中国語を一定程度学んだ日本人が主な対象となるこの辞典を、多数の中国人が日本語を学ぶ学生時代に愛用したという声を耳にするたび、大いに意を強くしている。

振り返れば、『中日大辞典』はほぼ20年ごとに版を新たにしてきた。今後、情報の多重化、媒体の電子化が進む一方で、中国語の需要はますます高まるであろう。そうした状況にも十分対応できる辞典として存在することを念願している。

〔注〕朝日新聞夕刊　二〇一〇年六月十七日（木曜日）所載。

著者に聞く『中日大辞典』を改訂

編集主幹　今泉潤太郎さん　愛知大学名誉教授

〝文化交流の架け橋に〟

日本初の本格的中国語辞典として広く活用されている『中日大辞典』（編・発行＝愛知大学中日大辞典編纂所、発売＝大修館書店）の第3版が、十数年におよぶ改訂作業を経て刊行された。『中日大辞典』は〝日中友好の船、文化交流の架け橋〟と呼ばれ、日中関係者の尽力で完成し、日中友好協会とも関係が深いという。その辺りの事情と合わせ、第3版の特徴を編集主幹の今泉潤太郎・愛知大学名誉教授にうかがった。

中日大辞典は、上海にあった東亜同文書院（愛知大学の母体）の中国語の教授が作成した資料カードが元になっている。敗戦でカードは国民政府に接収されたが、戦後、本間喜一・愛大学長がカード返還を中国の新政府に願い出た。内山完造・協会理事長、郭沫若・中国科学院長をはじめとした関係者の尽力で、「日中文化交流のために改めて日本人民に贈る」という異例の取り扱いで返還されることになり、１９５４年秋、カードは木箱に梱包されて引揚船・興安丸で日本へ運ばれた…

◇

本間学長は日中友好協会発起人の一人でした。５０年、協会の発起人会で本間学長が顔見知りだった内山理事長に返還の希望を中国側に伝えるようお願いしました。そこで島田政雄・協会理事が友人の康大川・新聞総署日本課長（「人民中国」初代編集長）に伝えて、カードの保管場所を突きとめます。返還が実現すると、協会は関係者を集めて協議し、辞典完成に熱心な愛大にそのカードを委託することを決めました。私が愛大を卒業した５５年に華日辞典編纂処が開設され、私の指導教授だった鈴木擇郎先生が編集委員長になられたのです。

中国語版「広辞苑」に

中日大辞典の初版は新中国建国後、第2版は文革を含めて８０年代まで、そして第3版は９０年代から２００８年までと、３つの大きな時代を反映しています。他の辞典に比べ１・４倍ほど分量が多いので、第3版は1割カットをめざして編纂し、結果的に５パーセントカットしました。

中日大辞典がめざしているのは中国語版「広辞苑」で、大学院生など中国語が一定レベルにある人が、近代以降の文献を読む時に大きな力を発揮します。また、科学技術関

係の語彙をできるだけ入れたので、中国と関わる理系の人たちにも使ってもらいたい。

辞典に対する〝日中友好の船〟という呼び方は、中国の方が揮毫してくれました。（原稿を）船に積んで持ち帰ったことをふまえているのでしょう。

長く編纂に携わってきて本間学長、内山理事長、郭沫若さん、康大川さんら（日中友好と中日大辞典完成のために）〝井戸を掘った人〟を忘れてはならないと強く感じますね。

〔注〕日本と中国　第２０５５号（二〇一〇年三月二十五日）所載。

東亜同文書院　記念賞第十七回授賞式

受賞者挨拶

安部　悟氏

本日はこのような栄えある記念賞をいただきまして、中日大辞典編纂所の代表としてお礼を申し上げます。

先ほどの高瀬先生のお言葉にもありましたように、１９３３年に東亜同文書院の華語研究部で鈴木擇郎先生を中心として華日辞典の編纂が始まりました。語彙カードを蒐集することから始まり、最終的には１４万枚ほどのカードが作成されましたが、日本の敗戦で接収されました。

その後多くの方々のご努力でそれらが戻り、愛知大学で編纂を行うこととなりました。本格的に編纂が開始されるのが１９５５年で、この時に華日辞典編纂所が設立されました。そこから考えますと今の中日大辞典編纂所は５６年目に入るわけで、かなり長い歴史がございます。

その中で６８年に初版を出し、８６年には第２版、８７年には増訂第２版という形で版を重ねてまいりましたが、この間、その中心となられた鈴木擇郎先生や今泉潤太郎先生のご努力はもちろんのこと、本当に多くの方々のご尽力、ご支援をいただいて編纂作業を進めてまいりました。そして昨年、何とか第３版を出す事ができ、私も非常に嬉しく思っておりますし、正直ほっとしております。

この第３版につきましては、今考えられる我々の力をすべてその中に注ぎ込んだつもりでおります。辞書というのは厚さに制約がございまして、あれ以上厚くすることはできません。今回の辞典編纂の中で一番苦労しましたのは、前回の改訂以後新しい語彙が飛躍的に増えているということです。

皆さんもご承知のように、改革開放路線以降の中国の変化は目まぐるしいものがございまして、その中で中国語の語彙もどんどん変化しております。その新しい語彙をいかに取り込んでいくのかというのが非常に大きな問題でありました。新しいものが出たのなら古いものは捨てたらいいというわけにはまいりません。辞書はやはりどうしても必要な語彙というものがございます。初版本で言いますと少し古い時代の語彙がたくさん入っておりました。増訂第２版では、文化大革命中の語彙がかなり含まれております。これらの語彙をどのように残して新しい語彙を入れていくのかというのが非常に難しいところでありまして、この点につきましては編集主幹の今泉先生のご判断で、本当にきちっとした形、つまり古いものでも残すべきものは残す、どうしても必要な新しいものは入れるという考えのもと、今回の第３版は作られております。

華日辞典編纂所は１９５５年にできておりますが、私も実は１９５５年生まれで、中日大辞典編纂所と同じ年を経てきており、これも何かのご縁かなと思っております。豊橋にございました編纂所が２００３年に名古屋校舎のほうに移転いたしまして、私はその時から所長をやらせていただいております。

ただ先ほども申し上げましたが、第３版の出版は編集主幹の今泉先生のお力に負うところが多いですし、今回はこれまでご尽力いただいた多くの方々を代表していただいたものと思っております。

これまで我々は、東亜同文書院からの伝統をしっかり受け継いでしっかり頑張ってやっていけという励ましのお言葉だろうと私は理解しております。来年から笹島に移転することになりますが、これまでの諸先輩方や多くの先生方のご努力を引き継いで、さらに発展したものにしていきたいと念じております。本日は誠にありがとうございました。

宮田一郎氏挨拶（４１期）

中日大辞典の第３版が出ました。辞書の編纂は大事業です。中日大辞典の第１版が出た当時、日本にあれだけの規模・内容の辞典はありませんでした。その後は匹敵するようなものが幾つか出ましたけれども、改訂版を出したものは一つもありません。ポケット辞典クラスではありますが・・・。この中でこの４０年ほどの間に２回も改訂版を出したというのは、愛知大学以外にありません。それほどに大変な事業でありまして、愛知大学の皆さまが払われたご努力に対し、心から敬意を表したいと思います。

かつて辞書を１冊出すのに、一人は命を縮めると言われていましたが、内山雅夫先生の訃報を耳にしたとき、このことがわたくしの脳裏によぎりました。先生は書院３４期、もともと丈夫なお体ではありませんでしたが、中日大辞典の完成のため命を縮められたと、わたくしはいまも思っております。辞典編纂のころ、鈴木擇郎先生にお会いすると、「内山君が頑固でねぇ・・・」とよく言っておられましたが、一つの親文字にいくつ意味を立てるかなどで、師弟の間できびしいやりとりがあったようです。学問を語るときの内山先生のきびしいお顔、「内山君がねぇ・・・」とぐちりながら、愛弟子に目を細めておられる鈴木先生の温容がいまも目に浮んで来ます。

これらの先生がたの志が愛知大学によって脈々と受け継がれていることに、書院同窓として心から感謝申し上げたいと思います。

〔注〕滬友会　基金会にゅーす第１２号　二〇一一年三月所載。

平成２２年度東亜同文書院記念賞・愛知大学同窓会最優秀奨励賞

受賞記念講演会

この度、愛知大学中日大辞典編纂所は、『中日大辞典』第三版の刊行（2010 年 2 月)と初版刊行以来の長年にわたる改訂作業に対して、平成 22 年度東亜同文書院記念賞および愛知大学同窓会最優秀奨励賞を受賞いたしました。これを記念し、前身の華日辞典編纂処創設以来 50 年以上一貫して辞書編纂に携わってこられた今泉潤太郎先生と、『中日大辞典』第三版刊行にご尽力いただいた顧明耀先生をお招きし、記念講演会を開催する運びとなりました。みなさま是非ご来聴下さいますようお願い申し上げます。

日時：２０１１年４月９日（土）１５：００～１７：００
場所：愛知大学車道校舎３階コンベンションホール
主催：愛知大学中日大辞典編纂所

【講演会】

挨拶　　佐藤元彦（愛知大学学長）
　　安部　悟（中日大辞典編纂所所長）

講演

「中日大辞典編纂所の歴史―書院から愛大へ― 」
今泉潤太郎（『中日大辞典』第三版編集主幹）

「『中日大辞典』第三版について」
顧　明耀　（『中日大辞典』第三版編集委員）

※参加費・申込み不要